論文

翟門生石床とゾロアスター教（上）

――中国ソグド図像の基礎的研究――

黒田　彰

〔抄録〕

翟門生石床一式は、世界最古の中国ソグド遺趾であり、その全容は先頃、呉強華、趙超氏による『翟門生的世界 糸綢之路上的使者』（文物出版社、二〇二二年）において公開された。翟門生石床の図像中に散見するゾロアスター教的要素をめぐっては、拙稿「翟門生石床の竹林七賢図―北朝における七賢図攷―」（『文明をつなぐもの 中央アジア』〈二〇二二年秋季特別展図録、MIHO MUSEUM, 令和四（二〇二二）年〉所収）の冒頭において概説を試みたことがあるが、例えば左側板表左の右上に見える鶏が、本石床の門楣にも見えるなど（稲垣肇氏教示）、その後さらに大きな進展を見せる。小稿は、現時点における前稿の追加報告であり、併せて、中国ソグド図像の基礎的研究を兼ねるべく、極めて稀覯に属するクーロス石床の図像などの紹介や、付図集として線描図による中国ソグド図像の集成（下に予定）を試みた。

キーワード　翟門生石床、ゾロアスター教（アヴェスタ）、中国ソグド図像、鶏（拝火壇）、クーロス石床

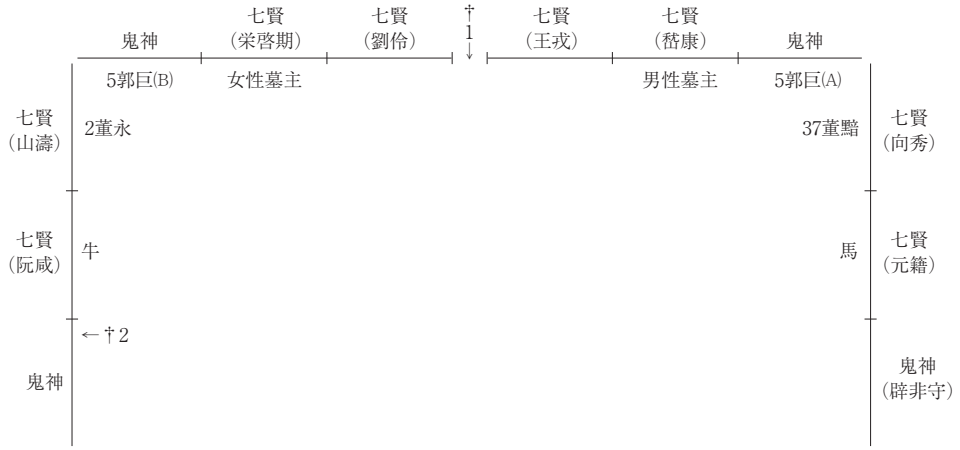
一

翟門生石床は、呉強華氏（深圳市金石芸術博物館）の所蔵に掛る、墓門、石闕（右、左）、石床、石枕などから成る、目下現存最古のソグド人遺趾と見るべきものである。縁あってその囲屏を紹介し、その表の面に描かれた孝子伝図を解説[1]、また、裏面に描かれた竹林七賢図を解説する機会に恵まれた[2]。さらにソグド人としての翟育（門生は字）を考察するという、望外の機会も与えられた[3]。そして、昨年（二〇二二年）八月、『翟門生的世界 糸綢之路上的使者』が公刊されたことによって、その全貌が世に知られるに至ったことは、所謂ソグド学

の展開に画期的な意義を齎すものであろう。[4]

翟門生は、東魏（北魏は五三五年に東西に分裂した）元象元（五三八）年に没し、武定元（五四三）年に葬られた（墓門誌）。図版一―九は、向後のソグド学、特に中国のソグド図像の研究に資すべく、翟門生石床の囲屏を中心として、その主要な図像を拓本により集成したものである。図版一は、その墓門の拓本を掲げたものである。[5]墓門における、門扉の閉口部の表即ち、両扉の閉口部表（右扉の左端と左扉の右端）に、二行ずつ計四行に亙って、墓誌の刻されていることが、本石床の学術的価値を決定的なものとしている。図版二は、その墓誌部分の上下を三分割し、アラビア数字で行数を、アルファベット小文字で続く順序を示したものである[6]（例えば、1aは1b、1cへ続き、2aは2b、2cへと続く）。かつて原石の写真により、同じ形式で墓門誌を掲げたことがあり[7]、図版二はその拓本版とも呼ぶべきもので、墓門誌釈読の参考とされたい[8]。図版三、四は、翟門生石床の右、左の石闕を、原石の写真と線描図で示したものである[9]。図版五は、翟門生石床、囲屏四面の表を、図版六は、その裏を拓本によって掲げたものである。表には、墓主夫婦像、馬、牛の他、孝子伝図（董黯、郭巨、董永）が描かれ、裏には、栄啓期と竹林七賢及び、鬼神が描かれている。今、その表、裏の内容を概念図として示せば、図一のようになるであろう[10]。図版七は、翟門生石床の石枕を、図版八は、その脚部（前脚、後脚）を、図版九は、その右、左の横檔を、それぞれ拓本によって掲げたものである。以上の翟門生石床の一式は、五四三年という制作年紀の古さから今後、中国におけるソグド図像研究の起点の一に据えられるべきものである。

前世紀末から今世紀に掛けて、従来の北魏時代の石床を中心とする墓葬図像とは一風、趣きを異にするソグド人遺品の出土、発見が相次ぎ、所謂ソグド学が空前の隆盛を見た。世界的なその思潮の中で、高い学術的な評価を得たソグド遺品の一つがMIHO MUSEUM蔵ソグド石床である。今般、MIHO MUSEUMの好意により、翟門生石床に次ぐ、二つ目の図版として、その全貌（囲屏、石闕）を図版十（双闕）、図版十二（囲屏十一面）に掲げることが叶った[11]。なお図版十一として、それらと一具とされる、ニューヨークのShelby White and Leon Levy蔵台座を補う[12]。また、図版十三、十四は、クーロス石床の囲屏と台座を掲げたものである[13]。日本において当石床の囲屏十面の図像を始めて紹介されたのは、曽布川寛氏による「中国出土のソグド石刻画像試論」（平成18〈二〇〇六〉年。線描図による）である[14]。曽布川氏はまた、それを初出として増補した「中国出土ソグド石刻図像の図像学」（臨川書店、平成23〈二〇一一〉年）を著し[15]（同じ線描図を使用。小稿で、専ら曽布川論文として取り上げるのは、こちらである）、ゾロアスター教と関わる極めて貴重なその図像内容を詳細に論じられたが、当書によってクーロス石床の図像は、一般にも見易いものとなった。所謂クーロス石床は、二〇〇四年四月十三日から五月二十四日までパリのギメ美術館において展示され、図録（Lit de Pierre, sommeil barbare）が公刊されることで[16]、原石のカラー写真を中心とするその図像の内容というものが世界的に知られることになったものである。曽布川氏が用いられた線描図も、その図録所収のものに外な



図一　翟門生石床の内容

らない。ところが、一方でその図録は極めて稀覯に属し、一般にそれを繙くことは、極めて難しい現状にある。そこで、この機会にそれを図版として収録することとした（その線描図は、(下)に収録予定）。なおクーロス石床は、Vahid Kooros 氏の蒐集品とされているが、その原石は、二〇〇二―三年間に甘粛省天水市石馬坪文山で出土し、海外へ流出した遺品であることが明らかにされている。[17]

さて、前掲書において曽布川氏が、中国出土のソグド図像資料として上げられたのは、以下の九遺品であった（216、218頁）。

（一）康業墓　石棺床囲屏　北周・天和六年（五七一）西安市未央区大明宮郷炕底寨村出土（二〇〇四年）

（二）青州傅家村墓　石棺床囲屏　北斉・武平四年（五七三）山東青州市傅家村出土（一九七一年）

（三）安伽墓　石棺床囲屏　北周・大象元年（五七九）西安市未央区大明宮郷炕底寨村出土（二〇〇〇年）

（四）史君墓　石槨　北周・大象二年（五八〇）西安市未央区大明宮郷井上村出土（二〇〇三年）

（五）虞弘墓　石槨　隋・開皇一二年（五九二）太原市晋源区王郭村出土（一九九九年）

（六）天水墓　石棺床囲屏　隋～唐　甘粛天水市石馬坪出土（一九八二年）

（七）石棺床囲屏　伝安陽出土　ボストン、ギメ、ケルン美術館分蔵

（八）石棺床囲屏　MIHO MUSEUM 蔵

（九）石棺床囲屏　Vahid Kooros コレクション（クーロスコレクション）

このことは、現在においてもなお基本的に変わりがなく結局、その九点に翟門生石床を（一）として加えた十点が、目下の中国ソグド図像の研究対象とすべき基本資料となるだろう。[18] そして曽布川氏は、「中国出土石刻画像の図像学」を著わされるに当たり、その「はじめに」において、上掲（八）（九）の遺品の意義を説明された後、氏の言う図像学の意味について、

（八）の石棺床囲屏は、滋賀県信楽のミホ美術館が近年購入したものであり、虞弘墓石槨出土以前はその性格、真偽については曖昧なままであったが、以後、ソグド系石刻画像と認知され、その特異な画像内容が注目を集めている。また（九）の石棺床囲屏は近年寄託先のギメ美術館で公開されたもので、石棺床囲屏として完備しているばかりか、ソグド人の信仰を知る興味深い図像が描かれている。筆者は、これらの画像に対して、図像学の見地から考察を試みることにする。これら中国出土のソグド石刻画像については、虞弘墓石槨発掘以来これまで、中国のみならず欧米の研究者たちによって多くの論考が発表されているけれども、その画像内容が中国を専門とする研究者にとっては余りにも未知のものであった。また欧米の主として中央アジアを専門とする研究者にとっても、わずかとはいえ従来中央アジアで発掘された画像とも明らかに異なるものであった。このため、こと図像学に関する限り、十分な成果があげられていないのが現状である（218、219頁）

と述べ、中国のソグド図像を通観した上で、個々の遺品の図像学的考察が必要であると主張されている。そして、従来の研究が図像学的に「十分な成果があげられていない」原因に関し、

これらの画像は、ソグド人という当時の東西貿易の最大の担い手による、まさに東西交流の所産であり、それを図像学的に解明するためには、当時の東西世界双方についての膨大な情報を必要とする。特に私たち中国が専門の研究者にとっては、ソグドを中心とする当時の中央アジアに関する情報、とりわけ画像が墓から出土した資料であるがため、彼らの死生観と関係した宗教関係の情報、つまり当時のソグド人が信仰したゾロアスター教の情報は必須である。これまで多くの研究者が不十分な成果しかあげられなかった要因も、ゾロアスターの死生観やそれに基づく葬制に関する情報の不足にあったことは否めない。現に上記のソグド人墓の墓主の多くは、ゾロアスター教（中国では祆教と呼ばれた）の祭祀をソグド人の聚落において主宰する薩保（薩宝）の官についた人たちであり、墓葬においてもゾロアスター教が相当な比重を占めることは当然予想される。ただし、ゾロアスター教の葬制といっても多種多様であり、とりわけソグドにあっては、本場のペルシアと異なる、土着の宗教や民俗と融合した独自性がつとに指摘されるところである（219頁）

と言われ、まず一般に余り馴染みのないゾロアスター教の教義、特にその死生観の存在を上げる。そして研究者側におけるその理解が、図像学の充実には必須であるとされたのである。その点、曽布川論文は

我が国において唯一、現存する中国ソグド図像を体系的にゾロアスター教の死生観から解明した業績となっている。加うるにもう一点、曽布川氏がソグドの図像学において問題視された課題として、中国の北朝的要素との関連がある。

また、従来の研究で気が付くことは、画像が登場人物はもちろん、題材も狩猟や饗宴など頗る西域的特色を帯びているため、西域の風俗、民族などに余りにも関心が行き過ぎ、もう片方の中国の北朝的要素に対する考察がないがしろにされたことである。思うに、中国に移住したとはいえ、ゾロアスター教徒であるソグド人がソグド独特の葬制を棄てて、墓道や墓室をもった土葬という中国に伝統的な葬制を採用していること自体驚きと言わざるを得ない。そこには当然妥協が行われたはずであり、どこまでが北朝であり、どこからがソグドなのか、見極めが必要となる。既に葬制が確立し、伝統的規制の強い中国にあっては、当初は中国の葬制を全面的に採用せざるをえなかったと思われるが、それをベースに採用しながらどこをどのように改変していき、結局どのような死生観を表そうとしたのか、ということである。それを明らかにするためには、当時鮮卑族が支配した北朝の葬制も十分に勘案し、お互いに比較することが必要となる（219、220頁）

曽布川氏は、ソグド人は「当初は中国の葬制を全面的に採用せざるを得なかったと思われる」との見通しを持っておられたが、今般出現した翟門生石床こそは、氏の見通しの正しさを確証する遺品ともなっているのである。曽布川論文から受けた学恩は、計り知れないものがあって、私が最も感銘を受けた点は、前掲九遺品の中国ソグド図像の全貌を、豊かな図版を用いて説明されたことである。中で惜しまれるのが、（九）天水墓の図像がないこと、（七）（八）が一面ずつしか紹介されないこと、[19]（一）康業墓の全十図中、半分の五図（正面右板と左側板）しか、図版がないことで、それらのことが通覧を困難としていた。そのような事情に鑑みて、小稿では、その不便さを解消すべく、巻頭図版と末尾付図集とによって、翟門生石床をも含め、全十遺品の図像集成を試み、今後の利用に備えることとした。その作業を踏まえた上で、以下、まず翟門生石床に看取されるゾロアスター教的要素について報告し、次いで、同石床における墓主肖像のずれの問題、また馬と牛の位置と向きが、中国ソグド図像の展開において、どのように変化してゆくか、という問題などに今後言及してみたい。曽布川氏の上げられた中国ソグド図像の九遺品に、翟門生石床を加えた十点を、改めて一覧とすれば、次の通りである。

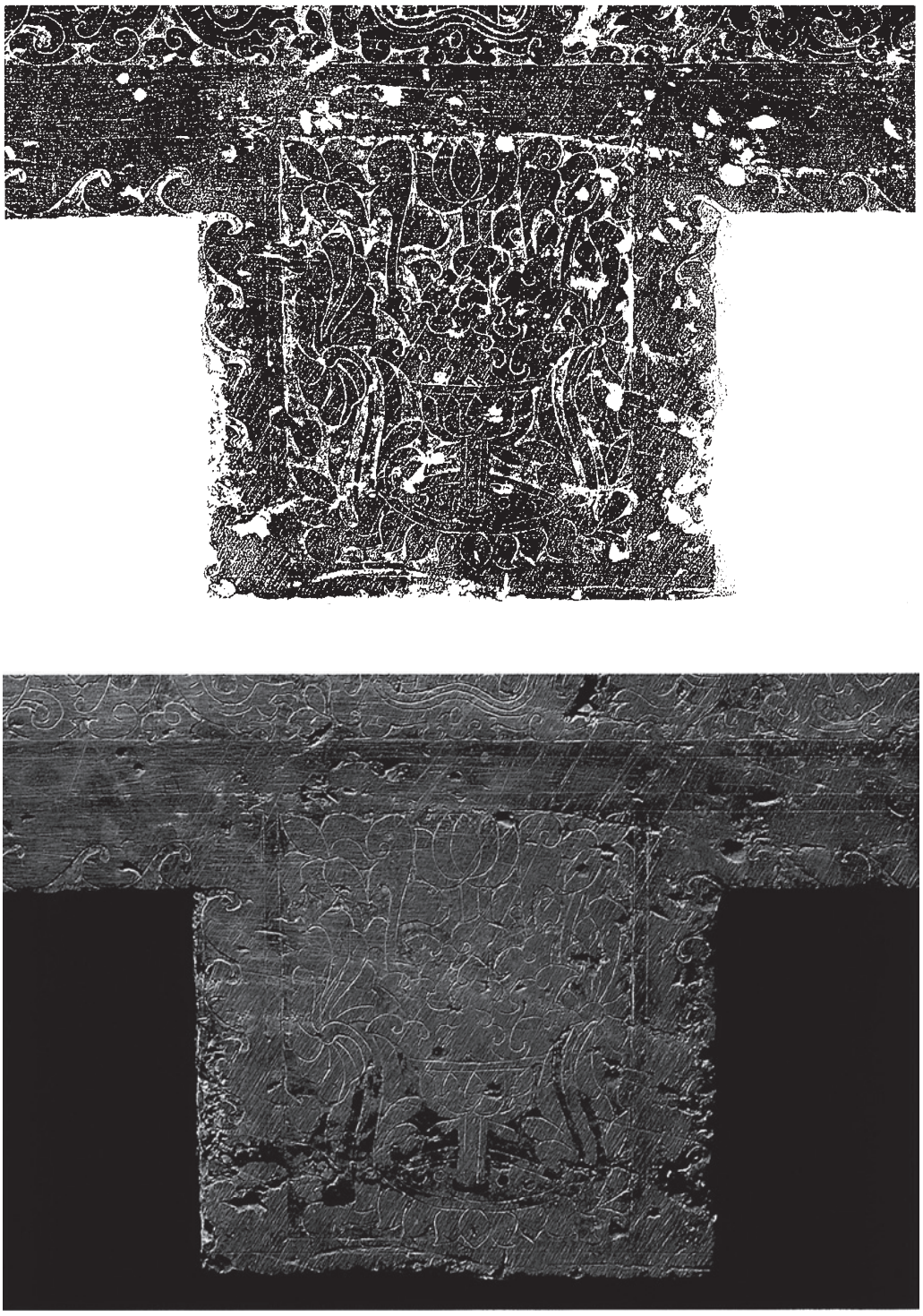
㈠東魏、翟門生石床（五四三年）
㈡北周、康業石床（五七一）
㈢北斉、青州傅家村石床（五七三）
㈣北周、安伽石床（五七九）
㈤北周、史君石室（五八〇）
㈥隋、虞弘石室（五九二）
㈦隋―唐、天水石床
㈧伝安陽出土ソグド石床
㈨MIHO MISUEM蔵ソグド石床

(十)クーロス石床

二

囲屏の表に墓主夫婦、馬、牛、孝子伝図、裏に竹林七賢と鬼神を描く翟門生石床は一見、純中国風に見える。とは言え、そこには男性墓主の着る毛皮のマントや、七賢の劉伶が掲げるリュトン（所謂、獣首杯）など、異国的な要素も垣間見えることは、かつて指摘した通りである。しかし、翟門生石床にゾロアスター教と関わる一面があろうことは、殆ど考えたこともなかった。そのような私を愕然とさせたのが、翟門生石床にゾロアスター教の拝火壇が描かれているという、稲垣肇氏の教示だった（確か深圳で一緒に拓本を見ていた時のことのように思う。一方呉氏もその拝火壇には、早くから気づかれていたようで、二〇一八年五月十八日から一九年五月十七日にかけて深圳、南山博物館で催された「翟門生的世界 糸綢之路上的使者」展のパンフレットを見ると、02翟門生石床後腿局部火壇図像の項目があって、既にその拓本図像が掲げられている）。その拝火壇は、後脚の中央の脚に描かれていて（図版八、下参照）、見ようとする者は、石床の背後に回り、しゃがまないとそれを見ることが出来ない（図一†1）。図二は、翟門生石床に描かれた拝火壇を、拓本（上）と原石写真（下）によって示したものである。[20] ゾロアスター教は、拝火教とも呼ばれる如く、火を非常に重視する宗教である。そして、その火は、アシャ（正義、天則）の教義と関連が深いとして、例えば岡田明憲氏は『ゾロアスター教神々への讃歌』において、次のように説明されている[21]（〔　〕は私補）。

「正義（または天則）」と訳されるアシャは、ザラスシュトラ自身の思想の中核に位置する概念である。ガーサー〔アヴェスターの最古の部分。頌〕にはこの語が一六二回も出てくる。しかし、このアシャなる語は、特にザラスシュトラ自身の教説にあっては、非常に抽象的な性格が濃厚であって、その理解を極度に難しいものにしている……ザラスシュトラ以前は、自然の秩序が円環的であり、永遠に反復するものであった。しかしザラスシュトラは、時間に始めと終りがあることを主張し、ここに真の意味で歴史的世界が開けたのである。そして、かかる歴史の摂理としてアシャをたてたのである。それでは、その摂理の実質的内容は何であったかと言うに、善悪による報応であり、これがすなわち神による審判の思想になる。かくて、ゾロアスター教の「正義」とは、善なる者を厚く賞し、悪なる者を厳しく罰することなのである。そして、このように報応の理念を悟り、善を選び、悪と戦う者が「善なる者」（アシャワン）と称されるのである。さらにアシャとの関連で、拝火教と称されるゾロアスター教の聖火について述べておく。ゾロアスター教では、彼らの聖火をアシャの具象形態と見、天上と地上の火を支配するのはアシャであるとする。そして、正義が最終的に実現される歴史の総審判にも、火が決定的な役割を演じるのである。かくて、ゾロアスター教徒は、燃えさかる聖火の中に、歴史の審判を感得するのである。そこに自己と世



図二　翟門生石床の拝火壇（上、拓本。下、原石）

界の運命がはっきりと示されるのである（19、20頁）

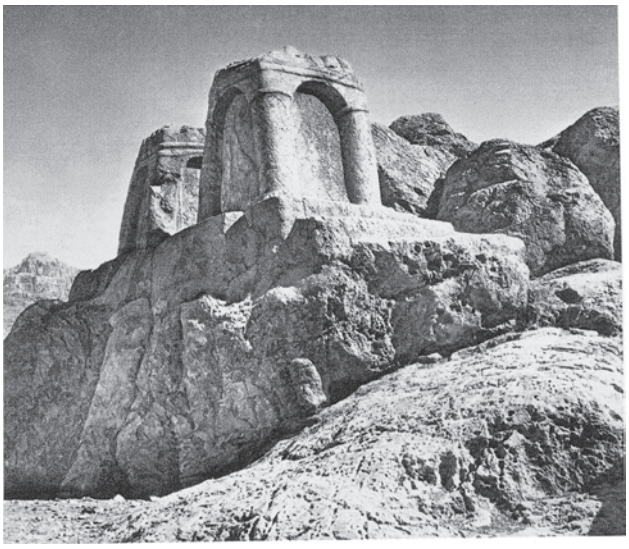
また、ゾロアスター教においては、一切を知る至上神アフラ・マズダーによって創造された大天使アムシャ・スプンタ（不滅の聖性）の下に、ヤザタ（崇めるに値する者）と称される、一群の神霊があり、そのヤザタの中に火神アータルもいる。岡田明憲氏は『ゾロアスター教の悪魔払い』において、アータルについて

インド・イラーン人の信仰では、火を神と人間の仲介者と考え、特にゾロアスター教では、火神たるアータルをアフラ・マズダーの息子と称して重視した。それ故、火は絶やしてはならず、汚してはならぬものとされる。火に息を吹きかけたり、火葬をする事は大罪に価するとされ、火の浄化に関しては細かな規定がなされている。家長の務めは火を消さぬ事であり、アータルは家長を起こして薪を炉に焼べさせる。アータルは多くの恩典を人間に与えるヤザタであるが、物質的なものと共に、知識、聖性、雄弁、理解力、記憶力といった精神的価値の賦与者である事を特長とする。彼の宿敵はダハーカ竜で、ザームヤズド・ヤシュトにはこの両者が光輪（クワルナフ）を得ようとして争った記事が見える。アヴェスタ中、ガーサーに次ぐ古層とされる「七章のヤスナ」では、アータルがアフラ・マズダーの創造行為を代表するスプンタ・マンユと同一視されていると解すことができる個所がある。ここから父アフラ・マズダーと子アータル、そして聖霊スプンタ・マンユの三位一体説が主張されてくる（39頁）

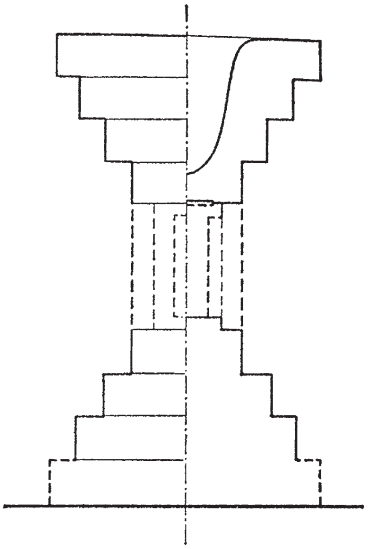
と述べられている[22]。拝火壇の遺趾は、古くアケメネス朝ペルシア（前五五〇―前三三〇）以前に溯る。図三は、アケメネス朝における拝火壇[23]（前六世紀。パサルガダエ、復元図）、図四は、ササン朝（二二四―六五一）における拝火壇（三―四世紀。ナクシュ・イ・ルスタム）を掲げたものである[24]。さらに青木健氏は、三世紀ササン朝ペルシアの時代から、「ある特定の土地に特定の聖火を祀るために、恒久的な拝火神殿を建設するようになる」と指摘され[25]、その中心に置かれたのが拝火壇（アーファルガーニャン）であった。拝火壇は、中国のソグド図像中にも屢々描かれている。図五は前掲、㈣安伽石床の門額に[26]、図六は、㈤史君石室正面（南）の右左の外壁下部に[27]、図七は、㈥虞弘石室正面の台座中央に描かれた[28]、拝火壇のレリーフを掲げたものである。このように拝火壇の図像を並べ掲げてみると、それらの描かれている位置関係が、とても面白い。即ち、

安伽石床（上）→史君石室（中）→虞弘石室、翟門生石床（下）

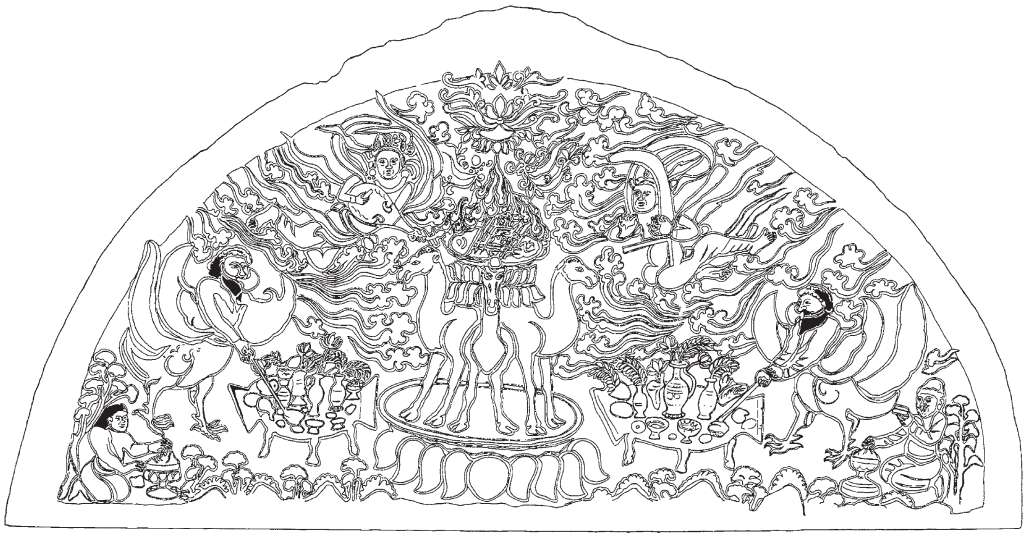
と、その位置が上から下へと移動しているのである。つまり㈣、㈤、㈥、及び㈠における拝火壇の図像は、門額から石床の囲屏部分へ、さらに台座、脚部へと移り動いている。なお興味深いのが、㈠本石床（翟門生石床、図二）と、㈥虞弘石室（図七）との拝火壇の位置関係であろう。即ち、両者は共に遺品の最下部（後脚中央と正面台座中央）にあり乍ら、前後関係から見ると、本石床は背面、虞弘石室は正面という風に、それらは正しく前後が対称的な位置にある。そして、それらを年代順に眺めると、背面下の中央（本石床）から、正面の上（安伽石床）へ、そして、中程の囲屏（史君石室）に下って、また正面下（虞弘石室）へという動きをしていることが知られる。共通の拝



図四　ササン朝の拝火壇
（3―4世紀、ナクシュ・イ・ルスタム）



図三　アケメネス朝の拝火壇
（前6世紀、パサルガダエ、復元図）



図五　安伽石床の拝火壇

図六　史君石室の拝火壇

図七　虞弘石室の拝火壇

火壇の図像を通じて見られる、そのような動きは、始め非常に目立たない背後に置かれたソグド的な図像が、徐々に前面へ、また中央へと出て来る過程を、よく表わしている。さて、翟門生石床の拝火壇が後脚に描かれることは、決して偶然ではなく、おそらく意図的になされた営為であろう。そして、その目的は、やはり誠にソグド的なそれを出来るだけ、目立たなくすることだったに違いない。一方、後脚とは言え、拝火壇が中央に置かれている点は、それが重要なものであったことを示しており、よく練られたプランであったと思われる。純中国風な事物の内に、さり気なくソグド的なものを忍び込ませることは、翟門生石床の特徴と捉えられよう。そこには、中国とソグドという、二つの異文化交流の典型的、且つ具体的な形を看て取ることが出来る。そして、ここで一つ確認しておきたい点は、翟門生石床が、中国ソグド図像の体系的な研究を進める上で、その始発とすべき、遺品に当たるという事実に外ならない。翟門生石床の図像中に、極めてソグド的で、ゾロアスター教に関わる図像が、それとは知られないよう、こっそり置かれているという点においては、次に取り上げる鶏の図像の場合も、全く変わりがない。

私が、翟門生石床に描かれている鶏及び、翟曹明墓門に描かれている鶏のことを知ったのは、呉強華氏の教示によるものである（呉氏は同時に小稿で用いる『三秦瑰宝 陝西新発現文物精華』をも併せて恵投下さった）。図八は、その翟門生石床の囲屏左側板左、右上に描かれた鶏を示したものである（図一†2。図版五、左下の左〈画面右上〉参照）。また、図九は、翟曹明墓門（靖辺県文管会蔵）の門楣に描かれた鶏を示したものである。[29] 鶏、特に雄鶏は、ゾロアスター教において極めて大切にされてきた動物の一つで、例えばアフラ・マズダーによって創造された大天使アムシャ・スプンタの下の、ヤザタと呼ばれる天使アシャ・ワヒシュタ（最善のアシャ）に協力する、忠直の神スラオシャは、雄鶏を使者とするのである。そのスラオシャに関し、例えば岡田明憲氏は『ゾロアスター教の悪魔払い』において、

スラオシャ

「忠直」の神たる彼は、ミスラ〔契約、太陽神〕と同様に真言の

図八　翟門生石床の鶏

図九　翟曹明墓門の鶏

具現者と称され、アフナ・ワルヤ等の聖呪を自らの武器とする。そして彼は、最初にガーサーを唱えた者とされる。元来スラオシャは、聖職者に特に密接な関係を有する神格であった。アフラ・マズダーは自らの教法をスラオシャに伝え、このスラオシャが人類に教示したとされる。それ故、既にガーサーにおいても、ザラスシュトラ自身がスラオシャをよび求めている。後にこの神格は、ラシュヌ〔正義の神〕、ミスラと共に特種な役割を演じる事になるが、ガーサー中でザラスシュトラが表明しているのは、三神中スラオシャのみである。スラオシャに献ずるスローシュ・ヤシュトは、アヴェスタ中に二つある。一つはヤシュト書中第十一番目に位置するものであり、他はヤスナの第五十七章である。前者は特にスローシュ・ヤシュト・ハーゾークトと称され、後者が記述的なのに対して、より祭祀的用途を考慮して構成されている。これらのヤシュトの描くスラオシャの像は、本来の聖職者的性格としてよりも、戦士、特に悪の勢力を駆逐する戦士のそれである。一日中彼は、アンラ・マンユ〔大悪魔〕や宿敵アエーシュマ〔怒りの悪魔〕をはじめとする悪魔の族と戦う。日没後も彼は眠ることなく、武器を手にして世界を悪魔の攻撃から護るとされる。ただ、彼がアーズィ〔貪欲の悪魔で、アジ〈竜〉と関わる〕により消されようとしたアータル〈火〉の危機を、雄鶏に時をつくらせる事によって救ったとされるのは、明らかに聖火を燃やし続ける事を義務とする聖職者の役割に関係している。中世の神学では、スラオシャに、ミスラ、ラシュヌと共に、死後の審判にお

ける判官の役割が与えられる。また、死して後四日目の朝、義者なる場合、彼がチンワトの橋を案内するとも説かれる。ここからゾロアスター教徒は、人の死後三日間、使者の為にスラオシャを祭るのである（24、25頁）

と説明され[30]、スラオシャ及び、ミスラ、ラシュヌには「死後の霊魂の守護神的性格を濃厚にする傾向」（23頁）があることを指摘されている。参考としてゾロアスター経の聖典、アヴェスタのウィーデーウダート（除魔書）十八章「悪い神官、雄鶏」における、スラオシャと鶏のことを述べた部分を示せば、次の通りである[31]（6、14―16、22―24、26―29節、野田恵剛氏訳による。私に〈　〉を補う）。

6おお、義者ザラスシュトラよ、彼を神官と呼べとアフラ・マズダーは言った、すなわち、夜通し義なる英知の神霊に尋ねる者を。〔その英知の神霊は〕苦しみから救い、チンワト橋で自由を与え、極楽で、良い生活を与え、生命に到達させ、アシャに到達させ、最も良きものに到達させる。

14ザラスシュトラはアフラ・マズダーに尋ねた。「アフラ・マズダーよ、最も恵み深い霊よ、物質界の創造主よ、義なるものよ。アシ〈ヤザタ（諸神）の一、大女神。アフラ・マズダーとスプンタ・アールマティの娘で、スラオシャは兄弟〉を伴い、勇敢で、聖句を体現し、頑丈な棍棒を振うアフラ〈善。ダエーワ（悪）の対〉であるスラオシャのスラオシャーワルズ〈神官〉は誰ですか。」

15そこでアフラ・マズダーは答えた。「ザラスシュトラよ、パローダルス〈雄鶏。予見する意〉という名の鳥である。それを口の悪いものはカフルカタートと呼ぶ。その鳥は明け方に力強く声をあげて鳴く。

16『人々よ、目覚めよ、アシャ・ワヒシュタを称えよ。ダエーワと誓絶せよ……

22そこで夜の三分の第三時に、アフラ・マズダーの息子である火は、アシを伴うスラオシャに懇願する。『おお、アシを伴う美しいスラオシャよ、私を助けるため物質界の誰かが、洗った手で清めた薪を私のもとに持って来るように。ダエーワの作ったアージ〈貪欲魔〉が、寿命の来る前にも私の生命力を切り裂こうとしている。』

23そこでアシを伴うスラオシャは、パローダルスという名のその鳥を起こす。その鳥を口の悪いものはカフルカタートと呼ぶ。その鳥は開け方に力強く声をあげて鳴く。

24『人々よ、目覚めよ。アシャ・ワヒシュタを称えよ。ダエーワと誓絶せよ……

26寝床に横になっている友が友に言う。『起きよ。〔雄鶏が〕私を急かしている。』二人のうち、初めに起きた方は天国へ行く。二人のうち、初めに、洗った手で清めた薪をアフラ・マズダーの火にくべた方に、アータル（火）は満足し、害されず、願いに応えて喜ばせる。

27牛の群れと多数の下僕があなたのものとなるように。活発な心と活発な生命があなたのものとなるように。あなたが生きている間、楽しく生きるように。これが、乾いて光明に清められ、アシャの

称賛に清められた薪をくべる者へのアータル（火）の祝福である。

28スピターマ・ザラスシュトラよ、私のこの鳥を、雄雌番で、正しいやり方で義者に与える者は、百本の柱、千本の梁、万の塔、万の見晴台のついた屋敷を与えたことになる。

29私のこのパローダルス鳥と同じ大きさの肉を〔義者に〕与える者には、私アフラ・マズダーは決して二度と問い直すことはない。彼はただちに極楽に行く

さて、その雄鶏をめぐっては、世界史的に古くからの造型を辿ることが出来る。図十は、MIHO MUSEUM蔵、前アケメネス朝の雄鶏形容器[32]（前七―前六世紀）図十一は、教皇礼拝堂宝物の頭光を持つ雄鳥（六―七世紀。錦織）を掲げたものである[33]。

図八、翟曹明墓門の鶏に話を戻そう。そもそもその墓門は一九九三年夏に、盗掘をきっかけとして知られるようになったもので、墓門の他、一対の石獅、七つの石座、さらに墓誌の断片が残り、その石座から、かつて石床の存在したことが推定されているが、その石床は、未だ見出だされるには至っていない。図十二は、翟曹明墓誌の拓本と原石写真を掲げたものである[34]。それらが出土した統万城は、五胡十六国の夏を建てた、赫連勃勃（三八一―四二五）が都した所でもある。墓誌によれば、墓主の翟曹明は北周、大成元（五七九）年三月に、九十幾歳かで没した（二月に改元されたので、正しくは大象元年となる）。翟曹明は夏州天主であって（天主は祆主に同じ）、ゾロアスター教に通じていたであろうし、その年齢から考えて、東魏の翟門生とも、時代の重なっていることが確かである。そして、両者の間には同じソグ

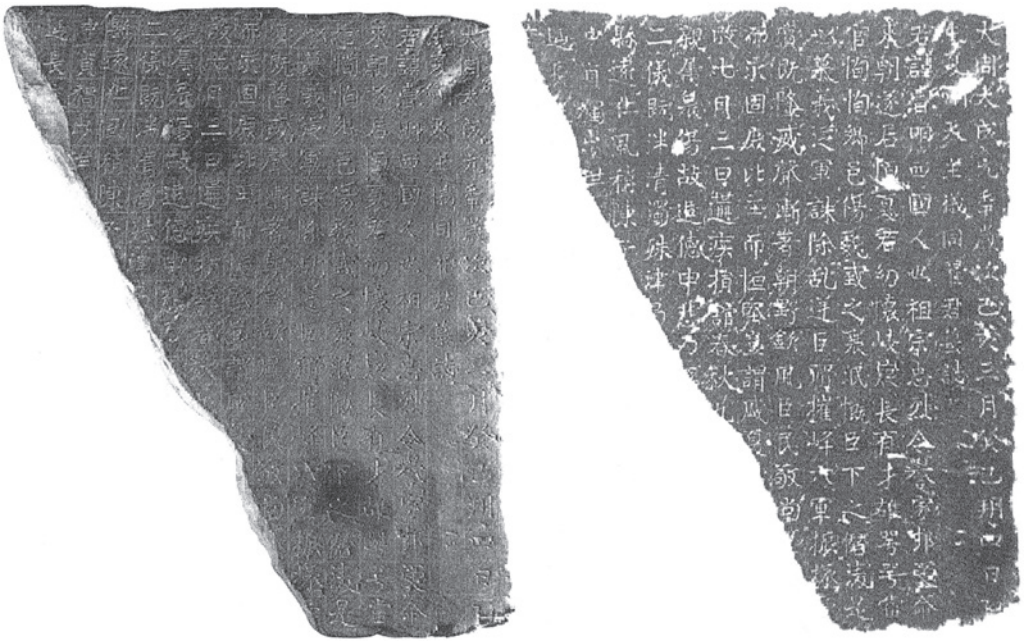
図十　前アケメネス朝の雄鶏

図十一　頭光を持った雄鶏

ドの翟国人として、敵対する東魏―西魏（北周）を跨ぐ、ネットワークの形成されていた可能性があることも、かつて指摘したことがある。[35] 図八、図九の鶏の関係の背景には、そのような事情の潜んでいたことを、併せて考える必要があるだろう。

三

さて、図九の翟曹明墓門の鶏をめぐり、驚くべき指摘をされたのは、沈睿文氏である[36]（「吉美博物館所蔵石重床的幾点思考」）。沈氏は上掲、(十)クーロス石床（図版十三、十四）の図像内容を考察する中で、その正面右板の左（図版十三(1)、上段右から三番目。後掲図十三参照）の男性墓主像の上部の図柄に注目された。図十三は、そのクーロス石床、男性墓主像の上部を示したものである。さて、左手でリュトンを捧げる墓主の上には、豪華な天蓋が下がっているが、問題は、その天蓋の上で向き合っている、二羽の鳥である。沈氏は、同様の天蓋と二羽の鳥がクーロス石床、正面左板の中央（図版十三(2)、上段左から二番目）の上にも見えるとし、図十三の二羽の鳥（聊か分かりにくいが、両鳥共に外側に向って、斜め下〈右下と左下〉へと飛び下る如く、頭部は下にあって、さらに内側へと振り返っている〈首を百八十度、回転させている〉）は、鶏冠（とさか）と二枚の肉垂（肉髯（にくぜん））があるので、鶏であるとされた。また正面左板の中央も、同様であると言われている。加えて氏は、件の天蓋に関し、それは安禄山事跡上や開元天宝遺事下などに言う、ゾロアスター教に関わる金鶏帳（障）のことであり、その前に置



図十二　翟曹明墓誌（右、拓本。左、原石）

図十三　クーロス石床の鶏

くとされる榻と共に、図十三に描かれているという、非常に重要な事実も考証されたのである。このことは、ソグドの図像学が歴史、文学の研究にも大きな役割を果たし得る、恰好の例である。沈氏はまた、さらにもう一つの鶏の図像も指摘されている。それが、㈤史君石室の東壁右に描かれた、橋を渡る駱駝の背中に負う、荷物に留まる二羽の鶏である。図十四は、史君石室の東壁右（E1）の全体、図十五は、その鶏を示したものである。[37] 図十四は死後の世界を描いたもので、その鶏の図（図十五）を理解するためには、やはりゾロアスター教の知識が必要となる。ゾロアスター教における人の死について、例えば岡田明憲氏は、前引『ゾロアスター教の悪魔払い』の中でまず、

臨終の者にとり、霊魂が肉体から離脱する瞬間は非常な恐怖を与えるものであるとされる。そして通常、この離脱は彼にとって未経験であり、極めて困難であって、それを助力する者を必要とする。それは、人がこの世に誕生するに際して、助産婦を必要とするのと同じである。そしてスラオシャがこの助力者とされ、彼は臨終にある者を導くとともに、死者の霊魂を狙う諸魔の攻撃よりそれを護る。それ故、生前から自らの死を覚悟して準備を怠ることなく、特にスラオシャを祭っておく事が望ましいとされる。もし準備なき場合も、縁者が死者に代ってスラオシャを祭るべきであり、その期間は死後三日間である。それは、死後三日間は死者の霊魂がこの世にあり、死者の頭の付近に留っているからである。この間、彼は生前の行為を想起して、それに伴う満足あるいは後悔の念にかられるとされる（66頁）

と述べられている。[38] そして、人は死後、四日目にチンワトの橋に赴くことになるが、図十四の下部に描かれている橋は、実はそのチンワト橋に外ならない。続けて岡田氏は、関係の深いダエーナー（大女神。褒美の女神アシの姉妹で、ミスラ、ラシュヌ、スラオシャを兄弟とする）と併せ、チンワトの橋に関して次のように説明された。

ダエーナー

死んで四日目の朝、死者の魂は霊界へと旅立つ。その際、アストー・ウィーザートゥ〔死を齎す悪魔〕やアエーシュマ〔怒りの悪魔〕が他の魔物とともに襲撃し、スラオシャ、ウルスラグナ〔戦勝の神〕、ワユ〔善悪二面を持つ風の神〕が加護するとされ

図十五　史君石室の鶏

図十四　史君石室東壁（E１）

る。そして、その者が善人である場合は、芳香が南風にのせられて漂う中を、一人の美少女が近づいてくる。彼女は死者のダエーナー（良心）であるとされ、十五才の長身で色白、そして乳房の張り出した容姿をもって描かれる。彼女の美しさは、死者が生前に見たいかなる女よりも優れている。彼女は死者の魂に、自らの美しさは彼が生前、善思、善語、善行の三徳により彼女を愛してくれた故であると告げる。善人の魂はこの美少女に伴われて、天国への旅に赴くのである。これに反して、死者が悪人の場合は、北風が運ぶ悪臭の中を、見るも醜悪な老婆が近づいて来る。この嫌悪すべき姿の女は、悪人のダエーナーで、彼が生前に為した悪業の故にかくも醜い姿をさらすのである。なお死者の魂がダエーナーと再会する場所については、チンワトの橋を渡る以前と、渡る後とする両説が在って一致していない。

チンワトの橋

ゾロアスター教では、この世とあの世の間には橋が懸っていると考える。そしてそれを特に「チンワト（検別する意）の橋」と称するのは、そこにおいて善者と悪者の運命が分たれるからである。すなわち、審判が行われるのである。この橋を、これまた此岸と彼岸の両世界の仲介者である四つ目の犬が護っており、善人が橋を渡るに際しては助力するが、悪人の場合は然らずとされる。それ故また、犬を迫害する者は、その子孫にまで及んでチンワトの橋は通過し難いものとなる。この橋は善人も悪人も等しく通過しなければならぬものであるが、善人の場合は橋の幅が広くなり容

易に渡る事ができるのに対し、悪人が渡る場合は狭くなってそこから真っ逆様に落下する。さらに善人の場合は、スラオシャやアータル、それに彼自身のダエーナーが助力してくれる。悪人はこの橋を渡る恐ろしさに耐え難く、刀にて切られ槍にて突かれる方がまだましだと泣くという。この橋を無事に渡り切った者は天国での運命を約束されるが、渡る途中で落下した者の行く先は地獄である。チンワトの橋はアフラ・マズダーによって作られたものとされるから、死後の審判は究極的には最高神自らの管轄にあるのは明白である。しかしゾロアスター教の神学では、特にミスラ、スラオシャ、ラシュヌの三神をもって死後の審判における判官とし、これに加えてウォフ・マナフ〔アムシャ・スプンタの一で、善思を意味する大天使〕を善・悪業の記録者とする。すなわち、チンワトの橋において、判官たる三神が、日に三度記されるとする善・悪業の調書に基づき、死者の魂に判決を下すのである（66、68頁）

以上の説明を元に、図十四（E1）の内容を少し考えてみる。画面下部の橋がチンワト橋であることは、先に述べた通りで、右下の橋の袂には、パダン（火を汚さないための白い布のマスクを付け、火挟みを持つ、二人の神官（マギ）が立っている。神官の左上と、さらに駱駝の左上に、燃え上がる二つの炎が見えるが、それらは拝火壇だろう。神官の上には、二匹の犬が描かれている。画面の左端、橋を渡り終えようとしているのが、墓主の夫婦である。一方、図十四（E1）上部の図像には、幾通りもの解釈が可能である。例えば曽布川寛氏は、右上の光輪中、三頭の牛の上に胡坐する神像を、ミスラ神と見、その下の山をミスラの住むハラー山であるとして、中央の牛の下に描かれた、有翼の人物を「死者の霊魂」（264頁）と捉えられている[39]（沈氏は、光輪中の神を風神〈後述〉、その左の有翼の女神をダエーナーなどとされる）。そして、曽布川氏が、「ミスラの図において、ミスラの円形光背の上に掛けてあった帯状のヴェールが二人の天使によってはずされようとしているが、これはミスラの登場が……死後の霊魂の出行が行われる夜明けのことであり、夜の間、輝く背光を覆っていたヴェールが夜明けとともに取り外されようとしていると解される」（264頁）と述べられていることがとても興味深い。因みに㈨MIHO MUSEUM蔵ソグド石床、正面左板の中央（図版十二の左上中央）は、図十四（E1）下部と同じ構図を持つことが報告されており、上記の解釈を裏付ける、極めて貴重な資料となっている[40]。図十六に掲げるのがそれである。図十六は、図十四に対し、左右を反転させているが、その右上には、確かにチンワト橋の一部が見え、駱駝の後半身も描かれている。そして、やはり橋の袂（左）には、パダンを付けた一人の神官が、火挟みを炎の中に入れて立っており、彼と橋との間には、燃え上がる拝火壇が描かれているのである。神官の左下には、一匹の犬も見えていて、図十六の図十四に酷似していることが知られるだろう。残念なことに、駱駝の過半は画面が切れているため、鶏が描かれていたかどうかは分からない。図十四をかく眺める時、例えば岡田明憲氏が、「死して後四日目の朝、義者なる場合は、彼〔スラオシャ〕がチンワトの橋を案内する」（25頁）と説かれる如く[41]、図十四における、死者がチ

ンワトを渡る時は、朝なのであり、その日の夜明けを告げるのは、スラオシャの使者の鶏だったことが理解されるのである。このようなコンテキストから、図十五の鶏は、描き込まれたものと思われる。

さて、沈睿文氏も同様のコンテキストから、㈩クーロス石床の鶏（図十三）、㈤史君石室の鶏（図十五）と共に、翟曹明墓門の鶏（図九）を上げて、それがアヴェスタに説かれる、スラオシャの使者としての鶏に外ならないことを指摘された。図十七は、その翟曹明墓門全体の写真を掲げたものである。鶏は、その上部の門楣の左右に描かれているが、両門扉には二人の武神が描かれる。その武神の被る日月冠（三面三日月）は、ソグド人のゾロアスター教と関わることが、姜伯勤氏によって早くに指摘されていた。[42] また、両武神は、剣と戟とを持っているが、その戟の方は、一風変わった三叉戟となっていて、沈氏はそれを、ゾロアスター教における、風神の典型的な造形とされている。加えて、図十四、史君石室東壁の右上に描かれた、光輪中の神像もまた、右手に三叉戟をもっていることから、沈氏はその事実を以って、件の神像を風神と認定する、根拠の一つとされたのである。[43]

一方、それに対して、曽布川氏がその神像をミスラ神とすることは、前述の通りだが、その持ち物と三頭の牛について、

この神像はまた三頭の牛に坐して右手には小型の武器状のものを

図十六　MIHO MUSEUM蔵ソグド石床（正面左板中央）

図十七　翟曹明墓門

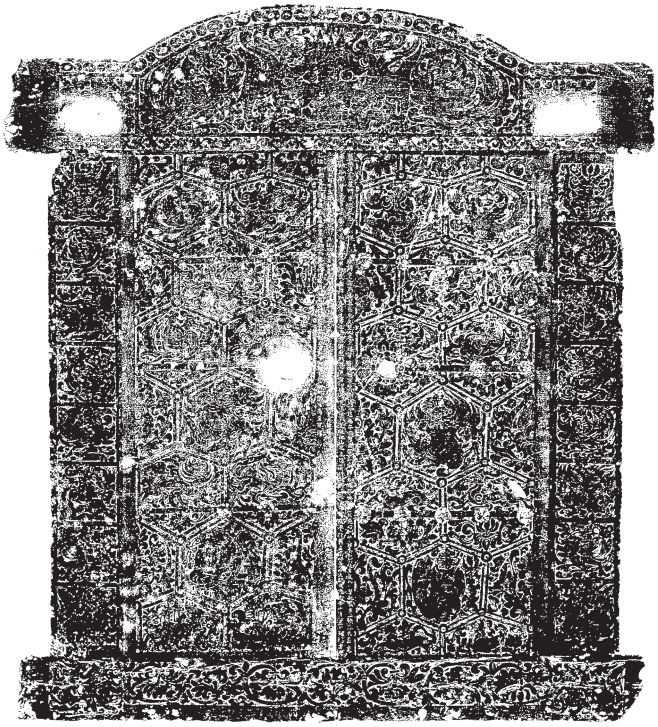
握っている。武器は刃が四つ放射状に出ているようにみえる。この持ち物については、「ミフル・ヤシュト」第二四節（96）がミスラ神の武神としての卓越を讃えていう、頑丈なる黄金で鋳造された最強の武器の「金剛杵」が該当するものと考えられ、ミスラ神はこれを「手に握って」敵を倒したと記されている。また三頭の牛の座については、「ミフル・ヤシュト」がミスラを讃える言葉として常に冒頭に「ミスラ、広き牧地の主を我らは祭る」と述べるように、牧地の主であったことと関係があり、ミスラ神の住むハラー山の牧地には「畜牛のために牧草が繁茂」していたという。司法神、太陽神、武神などミスラ神の有する多面的な性格のなかでも、「牧地の主」という恐らくは本来の牧畜神的性格を表さんがために三頭の牛の座に乗ると考えるのである（260、261頁）と述べられた。即ち、まずその持ち物は、アヴェスタのヤシュト（頌神歌）十章「ミフル・ヤシュト」24編96節に、

96彼は槌矛を手に持つ。それは百の突起、百の刃がついており、それが振りおろされると人を倒す。それは黄色い金属で、固い金でできている。武器の中で最も強く、武器の中で最も勝利に満ちている

とあることを踏まえ[44]、金剛杵であるとされるのである。金剛杵とは、サンスクリットのヴァジラ vajra の漢訳で、印度ヴェーダ神話のインドラ（仏教では帝釈天）などの武器として、よく知られている。金剛杵には、先が三つに分かれた三鈷杵（五鈷杵もある）があって、図十四の神像は、確かに三鈷杵を掲げているようにも見えるから、それが三叉戟か、金剛杵かということは、それだけで判断することは難しい。しかし、神像が牛に載っていることはとても重要で、ミスラの前身でもあるミトラス（ミトラ）神が、牛を屠る神として有名であったことを考慮すべきであろう[45]。ここでは立ち入らないが、図十四の神像は、牛や鶏などとの関連から、曽布川氏の言うミスラである可能性が高い[46]。

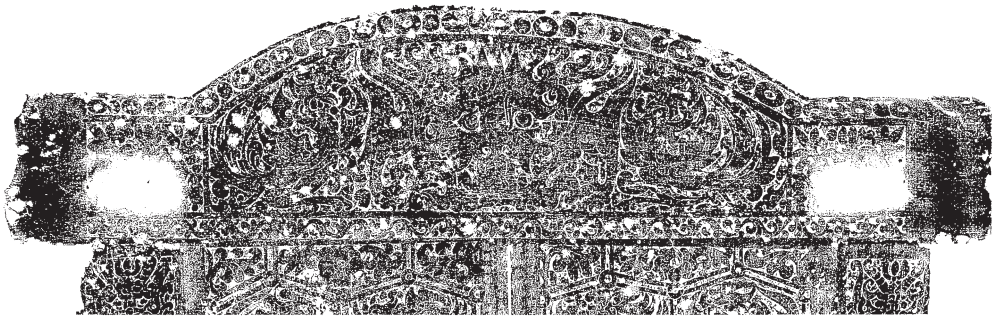
ともあれ、翟門生石床の鶏（図九）のことを考えていた私にとって、沈氏の鶏をめぐる考察は、画期的なものと思われた。一昨年十二月、図版二を製作するため、呉氏の許可の下、MIHO MUSEUM において、墓門（拓本）の撮影を行うことが叶い、稲垣肇氏が立ち会って下さった。同じ翟姓の墓門のことでもあり、私が稲垣氏に翟曹明墓門の鶏（図九、図十七）のこと及び、それに関する沈睿文論文の説（図十三、図十五）を話すと、稲垣氏が翟門生の墓門上部を指差して、「そう言えば、これも鶏ですね。鶏冠や肉垂がありますよ」と言われたことに、私は仰天した。図十八は、翟門生石床の墓門、そして、図十九と図二十は、その門楣と鶏を掲げたものである。翟門生石床の門楣（図十九）は、中央に饕餮（とうてつ）の紋、左右に鳥を描いているが、その二羽の鳥は、確かに頭を鶏として造形されており、沈氏の指摘されたクーロス石床の鶏（図十三）と同じである。私はそれらを鳳凰と思って見過越してきた訳で、先入観というものはやはり怖い。翟門生石床の門楣が中央に饕餮、左右に鶏を描くものであるとすると、それは翟曹明墓門の門楣（図九）と全く同じである。そして翟曹明墓門の門扉に描かれた二人の武神は（図十七参照）、翟門生石床墓門の門扉4層にも見えるから（図十八）、両者の意匠には意外に高い共通性が認められる。図二

十一は、翟門生石床墓門の門扉下部に描かれた、二人の武神を示したものである。武神二人は坐形で表わされ（左の武神は、牀の上に左膝を立てる）、右の武神は、右手に盾を構え、左手の剣を左の肩に当てている。左の武神は、左手で盾を構え、右手の剣を地面に突いて、その柄を肩に当てている。すると、翟曹明墓門の武神は、それらを立像にして扉の前面に拡大したものとも捉えられる。かく眺めるならば、両者の年代には三十年以上の隔たりがあるものの、翟門生石床の墓門は、翟曹明墓門の祖型をなすものと見做されるのである。

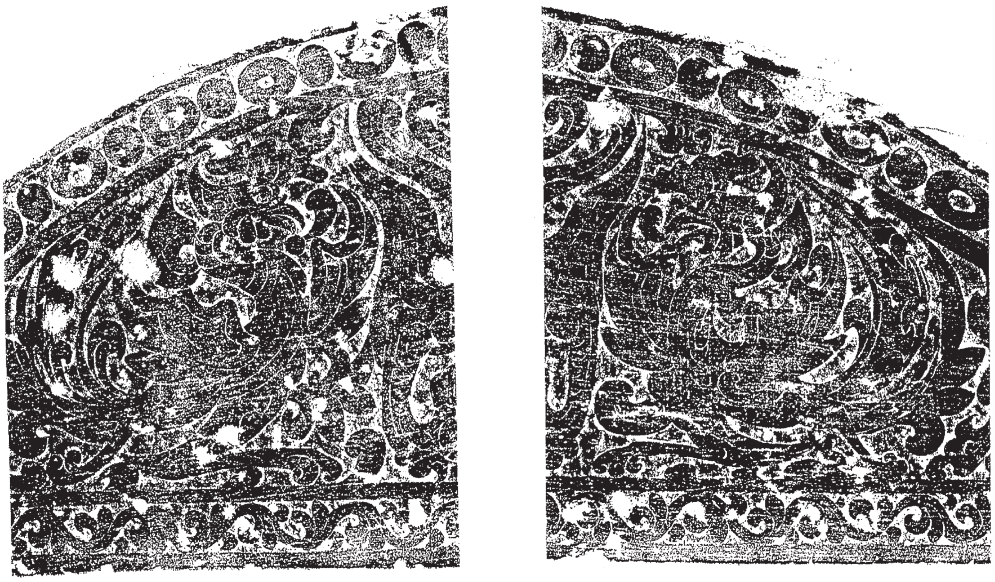


図十八　翟門生石床の墓門

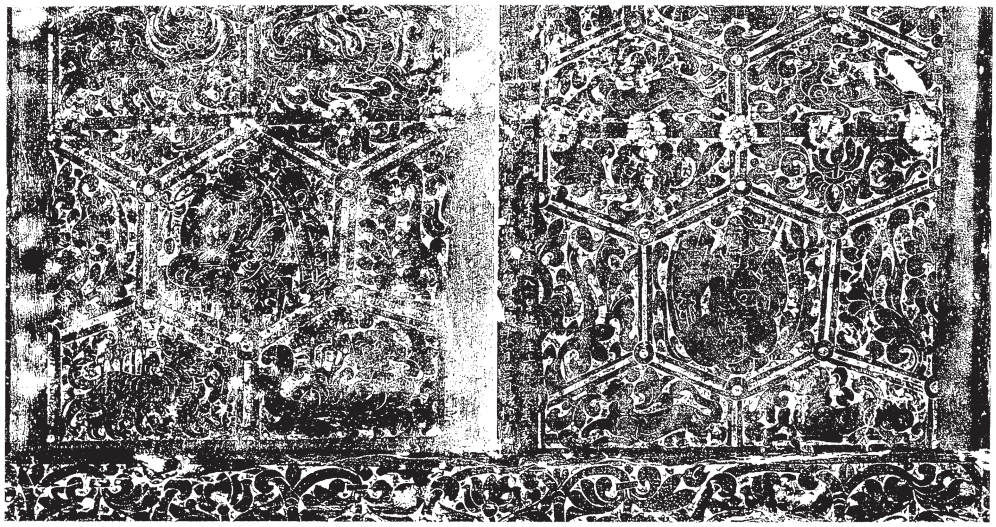
さて、翟門生石床の墓門門楣に鶏を認めると、思い掛けない視野が広がって来る。ソグド人ではないが、例えば北周婁叡墓（五七〇年）の墓門、北斉徐顕秀墓（五七一年）の墓門などの門額も、翟門生石床の門楣と同じく、饕餮紋の左右に鶏を配している。それらは一見、朱雀の如くだが[47]、やはり鶏冠と肉垂とが描かれ、頭部は明らかに鶏である。図二十二は、婁叡墓門額の鶏[48]、図二十三は、徐顕秀墓門額の鶏を示したものである[49]。では、婁叡や徐顕秀は、ソグド人ではないにも関わらず何故、彼らの墓門にゾロアスター教の雄鶏が描き込まれるのであろうか。間違いないのは、中国人もゾロアスター教を受容したということだろう。異文化の交流は、双方に影響を齎すからである。なおこの問題は、今後の課題としたい。



図十九　翟門生石床墓門の門楣



図二十　墓門門楣の鶏



図二十一　翟門生石床墓門、門扉の武神

図二十二　婁叡墓門額の鶏

図二十三　徐顕秀墓門額の鶏

〔注〕

（1）拙稿「呉氏蔵東魏武定元年の翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29〈二〇一七〉年3月）

（2）拙稿「翟門生石床の竹林七賢図―北朝における七賢図攷―」（『文明をつなぐもの　中央アジア』〈二〇二二年秋季特別展図録、MIHO MUSEUM, 令和4（二〇二二）年9月〉所収）

（3）拙稿「翟門生覚書―呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―」（『京都語文』25、平成29〈二〇一七〉年11月）。注（4）後掲書に中国語訳を収める）

（4）呉強華、趙超氏『翟門生的世界　糸綢路上的使者』（文物出版社、二〇二二年）

（5）図版一は、呉氏提供の拓本写真に拠る（以下も同じ）

（6）図版二は、黎明舎（立松洋行氏）の撮影、作成に掛るものである。

（7）注（3）前掲拙稿、図二（注（4）前掲書23頁、図二）参照。

（8）墓門誌の釈読については、注（4）前掲書2頁「翟門生墓誌釈読」参照。

（9）図版三、四は、注（4）前掲書図版14、13に拠る。

（10）翟門生石床の孝子伝図については、注（1）前掲拙稿を、その竹林七賢図については、注（2）前掲拙稿を、それぞれ参照されたい。

（11）図版十、十二は、注（2）前掲図録、図版[57]に拠る。

（12）図版十一は、Annette L. Juliano and Judith A. Lerner, The Miho couch revisited in light of recent discoveries, Orientations 32・8, October 2001, fig 5b に拠る。

（13）図版十三、十四は、Musée Guimet, Lit de pierre, sommeil barbare, Présentation, après restauration et remontage, d'une banquette funéraire ayant appartenu à un aristocrate d'Asie centrale venu s'établir en Chine au VIe siècle, Musée Guimet,Paris, 2004, 図24、23、20、19、17、14、29、27、13、10及び、図30、34、36、32に拠る。図版の順序は、同書の復元に従う。なおその屏囲及び、台座のモノクロ写真の図版は、徳凱琳（Catherine Delacour）、黎北嵐（Pénélope Riboud）氏（施純琳氏訳）「巴黎吉美博物館展囲屏石榻上刻絵的宴飲和宗教題材」（『4～6世紀的北中国与欧亜大陸』〈科学出版社、二〇〇六年〉所収）図二―図一七にも収められているが、その内の図一六中段、台座後面（118頁。図版十四、上に該当する）の左右が反転してしまっていることに注意する必要がある。また囲屏十面の線描図は、万毅氏「巴黎吉美博物館展胡人石棺牀図像試探」（『芸術史研究』12、二〇一〇年）図3―図12にも転載される。

（14）曽布川寛氏「中国出土のソグド石刻画像試論」（同氏編『中国美術の図像学』〈京都大学人文科学研究所、平成18（二〇〇六）年〉二部所収）

（15）曽布川寛氏「中国出土ソグド石刻画像の図像学」（曽布川寛、吉田豊氏編『ソグド人の美術と言語』〈臨川書店、平成23（二〇一一）年〉五部所収）

（16）注（13）前掲書

（17）万毅氏注（13）前掲論文及び、屈濤氏「出土証：一个無法回避的問題―法文版《石屏、野蚕睡眠》一書的另外一種〝読後感〟」（『粟特人在中国　考古発現与出土文献的新印証』〈寧夏文物考古研究所叢刊31、科学出版社、二〇一六年〉下所収）参照。なおクーロス石床は、欧州の私人蔵などとされることが多いが、それは有名なスイスの蒐蔵家Vahid Kooros氏の所蔵品であることを明らかとしたのが、B・I・マルシャーク氏で、同氏 The sarcophagus of sabao Yu Hong, a head of the foreign merchants (592–98) (Orientations 35・7, October 2004) 58頁に、

> a couch from the Vahid Kooros collection which was recently exhibited by the Musée Guimet (Musée Guimet, 2004)

とある。

（18）例えば、影山悦子氏は、以下の十三点をソグド人葬具として上げられている（同氏「ソグド人の墓と葬具―中国とソグドディアナ」〈森部豊氏編『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』、アジア遊学175、勉誠出版、平成26（二〇一四）年〉一所収）

①西安出土康業墓石棺牀囲屏
②陝西省靖辺出土翟曹明墓石門
③西安出土安伽墓石棺牀囲屏
④西安出土史君・康氏合葬墓石槨
⑤太原出土虞弘・妻合葬墓石槨
⑥甘粛省天水出土墓石棺牀囲屏
Ⓐ伝安陽出土石棺牀囲屏
Ⓑ MIHO MUSEUM 所蔵囲屏
ⒸⒹ S.White & L.Levy 私蔵石棺牀台座正面二点
Ⓔ V.Kooros 私蔵石棺牀囲屏
Ⓕ Victoria & Albert Museum 所蔵台座正面（G.Eumorfopoulos 旧蔵）
Ⓖ伝洛陽安備墓出土台座正面・背面

これを曽布川説と較べると、曽布川説の、

（二）青州傅家村墓

がないこと、及び、②、ⒸⒹ、Ⓕ、Ⓖ五点の墓門、台座を加えることが上げられる（②翟曹明墓門については後述する）。即ち、（二）を除く八点が曽布川説と一致することになる。（二）を除く理由として、影山氏は、

山東省益都では表面に線刻画のある石板が九点発見されている。そこには、深目高鼻のソグド人らしい商人の姿が表され、駱駝の背に商品を積んで運ぶ様子や、商品を主人に差し出す様子が表現されている。この線刻画に表された主人はソグド人である、とする見方がある。しかし、主人の顔つきは商品を差し出す商人とは明らかに異なっているし、彼の頭飾は、北斉に仕えた鮮卑系の徐顕秀の墓（太原、五六五年埋葬）に描かれた主人と同じであることから、線刻画の主人もソグド人ではなく鮮卑族と考えるのが妥当だろう（80頁上）

とされているが、今後の課題とすべきであろう。さらに影山氏の上げられた台座なども非常に重要だが、ⒸⒹとされたもの等、MIHO MUSEUM 蔵ソグド石床と一具のものであるなど（図版十一参照。影山氏「中国北部で居住したソグド人の石製葬具浮彫」〈『西南アジア研究』61、平成16（二〇〇四）年9月〉にその指摘がある）、なお整理が必要である。

(19)その内、（八）MIHO MUSEUM 蔵ソグド石床については、稲垣肇氏による「中国北朝製葬具の発達と MIHO MUSEUM 石榻囲屏門闕の復元試論」（『MIHO MUSEUM 研究紀要』9、平成21〈二〇〇九〉年3月）という、優れた論攷があって、ゾロアスター教を始めとする、多方面からの図像解説がなされているので、是非参照されたい。

(20)図二下は、呉氏提供の原石写真に拠る。

(21)岡田明憲氏『ゾロアスター教 神々への讃歌』（平河出版社、昭和57〈一九八二〉年）

(22)岡田明憲氏『ゾロアスター教の悪魔払い』（平河出版社、昭和59〈一九八四〉年）

(23)図三は、メアリー・ボイス氏『ゾロアスター教 三五〇〇年の歴史』（山本由美子氏訳、講談社学術文庫版、平成22〈二〇一〇〉年）五章112頁「パサルガダエの火の祭壇の復元図」に拠る。

(24)図四は、マロン・ギルシュマン氏『古代イランの美術』（新規矩男、岡谷公二氏訳、新潮社、昭和41〈一九六六〉年）Ⅰ図版276に拠る。

(25)青木健氏『ゾロアスター教』（講談社メチエ408、平成20〈二〇〇八〉年）134頁

(26)図五は、『西安北周安伽墓』（文物出版社、二〇〇三年）図一三に拠る。

(27)図六は、『北周史君墓』（文物出版社、二〇一四年）図版一四、一五に拠る。

(28)図七は、『太原隋虞弘墓』（文物出版社、二〇〇五年）図版七〇に拠る。

(29)図九は、『三秦瑰宝 陝西新発見文物精華』133頁に拠る。

(30)岡田氏注（22）前掲書

(31)『原典完訳 アヴェスタ ゾロアスター教の聖典』（野田恵剛氏訳、国書刊行会、令和2〈二〇二〇〉年）Ⅳ部に拠る。

(32)図十は、MIHO MUSEUM 注（2）前掲図録、図版[22]に拠る。なお同

図録二章「自然の循環を超えるもの イランの台頭と精神世界の転換」（稲垣肇氏執筆）「魂を覚醒させるもの」（48―50頁）には、前十三世紀以来の西アジアにおける雄鶏造型の系譜が詳論されており、図十と併せ見るべきFig. 20― Fig. 24が掲げられていることも非常に貴重で、是非参照されたい。

(33)図十一は、R・ギルシュマン氏注（24）前掲書Ⅱ、図版280に拠る。

(34)図十二は、羅豊、栄新江氏「北周西国胡人翟曹明墓志及墓葬遺物」（注（17）前掲書上所収）図11に拠る。その録文と考釈については、同論攷279―283頁を参照されたい。

(35)注（3）前掲拙稿

(36)沈睿文氏「吉美博物館所蔵石重床的幾点思考」（『三夷教研究―林悟殊先生古稀記念論文集』〈蘭州大学出版社、二〇一四年〉19所収）

(37)図十四、図十五は、注（27）前掲書図版三六、図版三八に拠る。

(38)岡田氏注（22）前掲書

(39)曽布川氏注（15）前掲論文

(40)曽布川氏注（14）前掲論文126頁

(41)岡田氏注（22）前掲書

(42)姜伯勤氏『中国祆教芸術史研究』（三聯書店、二〇〇四年）下編十章二（180、181頁）。なお日月冠（三面三日月冠）については、影山悦子氏「中国新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠―エフタルの中央アジア支配の影響―」（『オリエント』50・2、平成20〈二〇〇八〉年3月）に詳しい。

(43)沈氏注（36）前掲論文436、437、451頁。なお風神については、栄新江氏「仏像還是祆神？―従于闐看糸路宗教的混同形態」（『九州学林』1・2〈二〇〇三年冬季〉、二〇〇四3月）参照。

(44)野田恵剛氏訳注（31）前掲書Ⅴ部による。

(45)牛を屠る神としてのミトラス神については、例えばM・J・フェルマースレン氏『ミトラス教』（小川英雄氏訳、山本書店、昭和48〈一九七三〉年）に詳しい。ミトラス神はまた、鶏とも深く関わる神であることが注目される。例えばローマのアヴェンティヌ丘にある、サンタ・プリスカ教会地下のミトラス神殿（二〇二年改修）の左の壁面に描かれた壁画（二二〇年頃）中に、雄鶏を持つ一人物がいて、フェルマースレン氏はその事実について、

神殿内の左手の壁面には、スオウェタウリリア、すなわち、牡牛、羊、豚を用いた皇帝による公式の供儀の式典が、生々と描かれた壁画がある。正面には行列中の他の参会者たちと同じように、「獅子」位の称号をもつ信徒が歩を進める（この人物の部分は断片的にしか遺存していない）。次には、白い牛をひく人物がくる。その後からは大きな雄鶏を抱えた「獅子」位の信徒が行く。彼は短衣をまとい、あごの周りにきれいにカットされたひげをたくわえている。その次には、目の前の一頭の牡牛を駆りたてるために、前屈みになった人物がいる。画家の描き方は、いくぶん印象派風とでもいえるものである。彼は室内に目が向いている唯一の人物であるが、彼の視線と観察者のそれとが一致することはない。しかし、ひとたび入念に観察するならば、彼は決して忘れがたい印象を残す。彼は誇り高く自分の奉納物をもって行列に加わり、儀式に没頭しきっている。行列の最後には、「獅子」位にあるニケフォルス（意味は「勝利をもたらすもの」）とテオドルス（「神の賜物」）がつく。前者は聖什器を奉持し、後者は野猪を連れている。このシーンは三世紀におけるスオウェタウリリア祭の様子を示すものでしかないが、この種のテーマの絵では唯一の遺残物である。もちろん、それがミトラス神崇拝の中に現れるということも、注目すべきことである。牡牛が行列の先頭にあるが、カプアのミトラス神殿の壁画に出る、ミトラス神によって屠られる巨大な聖牛と同じように、その表面は白色である。雄鶏の存在もまた特記するに値する。それはサンタ・プリスカ教会のミトラス神殿では下層の壁画にも、さらにまた、左手の壁画にも見出される。雄鶏はペルシア神話では聖鳥であって、その鳴声によって悪霊たちを追い払うとされる。アフラ・マズダ神の信徒たちはこの鳥を神聖視し、とりわけ白い雄鶏はアフラ・マズダ神にもミトラス神

にも捧げられた。この信仰が西方ローマ世界に流布したことは、文献中にいくつも証拠がある。ヒッポリュトスが、洗礼は雄鶏がトキをつくる時刻に受けよ、と勧めるのは、悪魔王サタンとその配下のデモンたちを追い払うという雄鶏の力の信仰がすでに受容されていたことを示す。また、彼の記述は入信儀式の碑文中の「夜明けに」という文句を想起させる。ニケフォルスが手にしていた聖什器はブドウ酒用か、あるいは供儀式で屠られた牡牛の血を受けるためのものであったろう（58、59頁）

と述べられている。また、氏は、カウテスとカウトパテスという、「牛屠りの図に必ずついている……二つの神像があ」って、「上または下に向けた松明をも」っており、「前者は昇り行く朝の太陽の、また後者は沈み行く夕暮れの太陽のシンボルである」が、その「カウテス神の足元には、トキを告げる雄鶏が見える」（84頁）ことも指摘し、「古代ギリシアでは、鶏はペルシアの鳥と呼ばれた。また、その鳴き声は悪霊どもを追い払うとされた」（84、85頁）と言う。因みに、カウテスとカウトパテスという二神は、イランにおいてごく初期には、最高神とミトラ神とは区別されなかったが、やがてミスラとして、光の源の神であると同時に、一分身としてアフラ・マズダーに従属するようになって、さらに最高神が脇侍神（アムシャ・スプンタ）を持つようになると、ミスラ神もスラオシャ、アシを脇侍神とするに到り、その両神が後世の密儀において、カウテスとカウトパテスとして現われた、と説明される（13、14頁）。なおクシャン朝（1―3世紀）の話だが、M・ボイス氏が、

東バクトリアのスルフ・コタルという丘の上では、クシャーン朝初期の大聖所が発掘された。そこで、二羽の大きな鳥の飾りがある石のベンチのような祭壇と、大量の木炭がある建物が発見されたので、そのなかには、火の寺院があったと考えられる

と述べられていることも（同氏注（23）前掲書168頁）注目される。なおその二羽の鳥の図像は、安田治樹氏「スルフ・コタル遺跡―クシャーン朝の特異な宗教的遺構」（『仏教芸術』179〈昭和63（一九八八）年7月〉）口絵8などで見ることが出来る。

(46)なお影山悦子氏は、E・ドゥ・ラ・ヴェシエール氏や吉田豊氏の名を上げて、マニ教との関連に注目すべきであるとされる（同氏注（18）前掲論文82―85頁）。

(47)影山悦子氏がP・リブー氏の説を上げ、安伽石床の門額（図五参照）などに頻見する、半人半鳥の神官（パダンを付けている）は、スラオシャの使いとしての雄鶏であって、四神の一の朱雀と深く関わり、徐顕秀墓の門額（図二十三）と安伽石床のそれ（図五）とを比較して、拝火壇の両側でその世話をする神官（人。影山氏は図9として、ムラクルガン出土のオッスアリの写真を掲げられた〈72頁〉）の図像と徐顕秀墓門額のような、「朱雀が獣面の両側に立つ図像とが合体して、ソグド人葬具の半人半鳥の図像が生まれたと考えられる」（82頁）とされていることは、非常に重要である（同氏注（18）前掲論文80―82頁）。

(48)図二十二は、山西省考古研究所、太原市文物考古研究所『北斉東安王婁叡墓』（文物出版社、二〇〇六年）彩版八に拠る。

(49)図二十三は、太原市文物考古研究所『北斉徐顕秀墓』（文物出版社、二〇〇五年）図版9に拠る。

〔付記〕貴重な図版の掲載をご許可下さったMIHO MUSEUMに対し、心から御礼を申し上げる。特に様々な教示を惜しまれなかった稲垣肇氏の学恩は忘れ難いものがある。など小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

（くろだ　あきら　日本文学科）

二〇二三年十一月十三日受理